

「小さいことはいいことだ」という新しい人間社会に！！

超小型車の普及で新しいモビリティ社会を築け

エネルギー危機を警告した「スモール・イズ・ビューティフル」 物質至上主義と科学技術の巨大信仰を痛撃する

いま、「スモール・イズ・ビューティフル」の社会を迎えている。

この言葉は1973／昭48年にイギリスの経済学者、エルンスト・フリードリッヒ・シューマツハーが執筆した経済学に関するエッセイ集で、エネルギー危機、仏教経済学などが説かれている本のタイトルだ。

イギリス石炭公社の経済顧問であった著者は、来るエネルギー危機を本書で予言し、それは第一次石油危機(1973年、日本ではトイレトペーパー騒動やデパートのエスカレーターの一時的な運転中止などの社会現象も発生した)として現実化した。現代文明の根底にある物質至上主義と科学技術の巨大信仰を痛撃しながら、体制を越えた産業社会の病根を抉(えぐ)ったその内容から、いまや「スモール・イズ・ビューティフル」は真に新しい人間社会への指針と示唆を与えてくれる。

「人間は小さいものである。だからこそ、小さいことはすばらしい」とシューマツハー言う。

人類は際限なく石油、原子力などのエネルギーを使い続け経済発展を遂げ、モノの豊かさが幸福度の尺度となり、「大きいことはいいことだ」の時代がしばらく続いた。このフレーズはもはや旧聞に属する話だが、いざなぎ景気(1965／昭和40年11月から1970／昭和45年7月までの57ヶ月間続いた好景気)の中で、高度成長を続けている日本経済は、ついにGNPが世界第2位となった。大量消費ブームはなかなか衰えず、人々は、まだまだ高度成長への期待を夢見ていた。そんな社会風潮を反映するかのようになり、「大きいことはいいことだ」と、山本直純のオーバーな指揮で、1500人もの出演者が大合唱する天真爛漫な、少々大袈裟とも思える製菓会社のCMが出現し流行語となった。

自動車デザイナーの和田智氏は「人間とはなかなかブレーキの利かない、逆戻りのできない生き物」と言っている。

「ヒューマン(人間中心主義)」が重んじられる21世紀社会。日本はリーマンショック、東日本大震災の3.11以来「小さいことはいいことだ」という多様性のある価値社会に変貌したと思う。「小さいこと」とはモノの大小ではなく経済、環境、省エネさらには人間性(人間的なものはみな小さくあるべきだ)への理念、コンセプトでもある。

モビリティ社会、超小型車で新市場の創出を 国交省、認定基準を今秋に新設、安全基準など課題の解決を

人口の減少、少子高齢化時代になり市街地の空洞化や地方の公共交通機関の廃止が進むなか自動車社会が変容してきた。

高齢化社会や環境問題への対応から、国土交通省が軽自動車より小さい「超小型車」(1~2人乗りで1日10キロメートル以下の近距離移動ができる自動車)の認定基準を今秋をめどに作るという。

高齢者でも運転できる定員2人の車で半径5キロ圏の近距離移動の足として使う。電気自動車(EV)の普及にも役立つ方針だ。

トヨタ車体は最近、1人乗りの超小型電気自動車の新型「コムス」を発売した。規格は第1種原動機付自転車(四輪)に準拠、道路交通法上では普通免許で時速60キロまでの走行が可能。セブンイレブンは商品の小口配送に活用する。

Hondaは、一輪車のように座って乗る一人用移動マシン「UNI-CUB」(パーソナルモビリティ)を発表、スズキも1人乗りで最高時速は人が歩く速度とほぼ同じ6キロメートル/hの「PIXY」を開発している。日産でも仏ルノーの車をもとに開発した超小型EVによる公道走行実験を横浜市などで始めた。このように新しいモビリティ社会を切り開く時代となった。超小型車は自家用車だけでなく、例えば札幌市の大通公園や中心街で観光目的や高齢者の買い物、娯楽などの新たな用途も期待できる。

しかし、超小型車の利用には解決すべき課題が多い。安全基準や保険、車検制度、駐車場問題などだ。車の規格には普通車、小型車、軽自動車などがあるが今、車はダウンサイジング化が進む。軽自動車の普及が著しいなか超小型車の認定基準は市場のすそ野を広げる制度とすべきだ。

これからの自動車社会は豊かな「スモール・イズ・ビューティフル」の時代となることが大切だ。